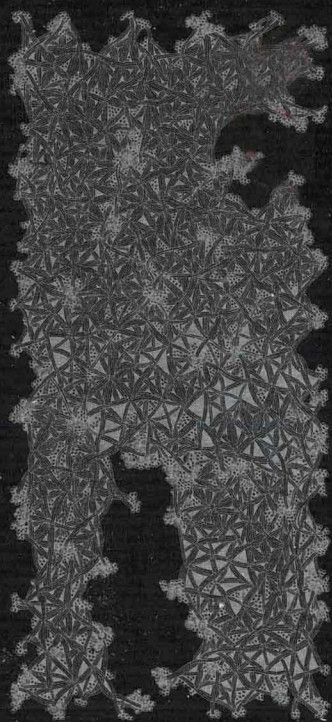




吉行淳之介の研究

実業之日本社



# 吉行淳之介の研究

昭和五十三年六月二十五日 初版発行

編者 山本容朗

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

電話 〇三(五六二)四三一一

振替 東京一―三二六 一〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七

梅田第一ビル

電話 〇六(三一二)一五七三

印刷所 東京研文社

製本所 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© 3095—506050—3214

吉行淳之介の研究 目次

# 1 吉行文学についての考察………9

人間疎外の文学

高見 順 10

危険からの脱皮

十返 肇 19

✓闇のなかのユートピア

川村 二郎 23

✓『暗室』について

川村 二郎 38

✓ストイシズムとその彼岸

磯田 光一 47

異端者のエリートの文学

奥野 健男 55

薔薇の墓場

小川 徹 72

性の不毛の作為性

福田 宏年 86

性の原風景

川嶋 至 98

✓吉行淳之介における性

加賀 乙彦 110

不決定の美学

清水 徹 114

✓醒めている片目

平岡 篤頼 125

吉行文学における年齢の意味

河野多恵子 133

南瓜の馬車が迎えにくるまで

種村 季弘 141

✓吉行淳之介の△私✓意識

清水 信 151

✓吉行淳之介論のために

三好 行雄 158

その人と作品

岡田 弘 163

## 2 吉行淳之介という人間……………171

「広い野原の中の吉行淳之介

森 茉莉 172

麻布中学のことなど

北 杜夫 173

終戦後三年目……

澁澤 龍彦 175

『世代』のころの吉行のこと

浜田 新一 177

曇のち晴

中井 英夫 179

過渡期のドラマ

岡 富久子 180

雌伏期の彼	大井 廣介	187
清瀬村にて	庄野 潤三	189
療友としての彼	飯島 耕一	191
軀	山口 瞳	193
世代をつなぐ鞆帯	田辺 茂一	195
吉行さんの靴と平さんの靴	田中小実昌	198
Mの存在	大久保房男	201
お兄さんのパジャマ	吉行 和子	203
兄のこと	吉行 理恵	204
吉行IIホームズ説	井上ひさし	209
吉行さんの存在	野坂 昭如	210
魔術師のアブリダシ	長部日出雄	212
彼の人徳	遠藤 周作	213
吉行淳之介と阿川弘之	近藤啓太郎	215

吉行淳之介と野坂昭如

金井美恵子

220

指

水上勉

228

吉行のこと

安岡章太郎

229

### 3

吉行淳之介エピソード集

山本容朗

247

### 4

作家に聞く…文学創造の秘密

森川達也  
日野啓三

285

年譜

青山毅編

326

収録作品初出一覧

336

編者あとがき

338



装幀 前川 直

吉行淳之介の研究



1 吉行文学についての考察

## 人間疎外の文学

高見 順

吉行淳之介は『驟雨』（昭和二十九年）で芥川賞を受けた。そのことで『驟雨』は彼の出世作であり代表作であると思われているが、私はこれを彼の作品として必ずしもすぐれたものとは思わない。彼はもっとすぐれた作品群を持っている。しかし私がここでこの『驟雨』を

みる。そうになると、やはりこれは代表作とせねばならぬということにもなるうか。

まずもって手がかりにして彼の文学的特質を語ろうとするのは、それが一般に代表作とされているからというより、この作品は、たとえ私がこれよりもっとすぐれた作品を彼は持っていると思っても、その、よりすぐれた作品をも含めてすべての彼の作品について考えようとするとき、もっとも私の興味をひく彼の文学的特質のいくつか、言いかえると、作品自体が彼の文学の独自性をみずから呈示し、私たちに語りかけてくるいくつもの、それらをすべて内包しているからで、その点については、『驟雨』よりもすぐれた作品ではかえってそういうものをひき出すのに適當でないからかもしれないのであ

この『驟雨』は吉行淳之介の「娼婦もの」（と仮りに名づければ）のひとつである。だが、「娼婦もの」としてのこの作品は、娼婦という特殊な女性を、たとえば荷風の作品のような描き方で描いたものではない。つまり娼婦らしい娼婦の女性像とか、現代の娼婦の典型像とか、そういったものが描かれているのではないし、そういう人間像を描こうとしたのでもない。この作品に出てくる娼婦は、はじめから作者によって、娼婦の町にいる娼婦らしくない女として紹介されている。作品の主人公山村英夫が「興味を惹かれた」のは「この町と女とのアンバランスな点に懸って」いる。「下着だけになって寝具の中へ入って」きた娼婦道子には、「娼婦に相應しくない慎み深い趣が窺われた」とも作者は書いている。では、娼婦の町に珍しい、いわば素人っぽい女に好色的な

興味をひかれたのか。そうではなくて、たとえそれが娼婦らしくない女にしろ、その女がやはり娼婦だったから彼はひかれたのだ。「女をこの地域の外の街に置いて真昼間に眺めてみたら、その興味は色褪せるであろう」と山村英夫は考える。「むしろもっと娼婦らしい女の方がこの夜の相手として適当だったのだが」と「遊客としての彼」がそういうふう感じて居るのは、彼の求めて居るものが、あくまで娼婦でなければならなかったからである。彼はあくまで娼婦を欲している。娼婦を欲して、独身の彼はしばしば娼婦の町を訪れている。娼婦がこのような彼の氣に入っているのは、なぜか。「このような娼婦の町を、肉体上の衛生もかなり行届いているとともに、平衡を保とうとしている彼の精神の衛生に適っている」と、彼は見做していたのである。」そうした山村英夫は自分のその「精神衛生」について、みづからこう考えている。「愛することは、この世の中に自分の分身を一つ持つことだ。それは、自分自身にたいしての顧慮が倍になることである。そこに愛情の鮮烈さもあるだろうが、わずらわしさが倍になることとしてそれから故意に身を避けている」のである。

これはこの作品の主人公である山村英夫の個人的な氣質というより、作者はそこに現代青年のある一般的な精神的姿勢を見ているのである。小説の主人公として、娼

婦の好きな風変わりな性格を選んだというのではなく、その性格や氣質のなかに普遍的な現代青年の精神像を託したのである。このように山村英夫を特殊な氣質としてではなく、現代におけるひとつの人間典型として（これについての説明は、あとで述べる）とらえているところに、吉行君の独自性がある。すなわち、吉行君の書こうとしたことは、娼婦の生感といったものでもなければ、娼婦の家に入り浸っている好色な青年の生感といったものでもなく、現代におけるある典型的な青年と娼婦との交渉なのである。

「愛する」ことを避けるために、もっぱら娼婦の町を訪れていたこの山村英夫が、やがて娼婦道子を「愛する」ようになる。そうなると相手が娼婦である以上、「愛する」女と他の男の交渉が当然気になってくる。「苛立しさ」が彼を襲い、「彼はその苛立しさを、あくまで生理的なものに見做そうとしていたが、しかしそれだけでは済みそうにない症状が次第に濃厚にあらわれはじめた」のである。精神がそこに関与してきて、彼女に対して心理的な好意を抱くようになり、この娼婦の町に「情緒」さえ感じはじめた頃は、「それまで道子が娼婦であることが彼の精神の衛生を保たせていたのだが、ひとたび彼女を愛してしまつたいまは、そのことが総て裏返しになつて、彼の心を苦しめにくる」結果となる。——この

ところは吉行君の初期の作品『谷間』（二十七年）の次のような言葉を思い出させることにおいて一層興味があり、特に『谷間』が初期のものであり「娼婦もの」ではないことにおいて、この相似は重要なのである。『谷間』のなかで彼はこう書いている。「相手の心について少しも考えることを必要としないことを前提とした女性関係が、このような結果を迎えようとは、私もまったく想像しなかった。」これと、『驟雨』との相似は、相似というよりは、作者がながい間、心に抱いていた問題がここにあることを示すのである。更にこれは『驟雨』が単に娼婦との交渉を書いたものというより、作者がながい間、心に抱いていた問題をふたたび小説として書くこととしたとき、娼婦をとらえてくることも適切だったのだということ告げるのである。『驟雨』の山村英夫は「相手の心について少しも考えることを必要としないことを前提とした女性関係」として、それにもっとも適切な相手の娼婦を選んでいたのだが、彼の避けていた「愛する」結果に陥ったのである。彼は嫉妬に嘸まれる。「狹斜の巷の女にたいして、この種の嫉妬を起すほど莫迦げたことはない。……理性ではそう納得しながらも、嫉妬の感情はすでに動かし難く彼の心に喰い入っていた」のである。

生命が彼を裏切ったのである。そしてここに生命的な

ものの回復がある。すくなくとも回復の第一歩がある。

「人を押ししているつもりで、ほんとは人から押されているのだ。——現代を象徴する言葉として、こういうことを言ったのは誰だったか。『驟雨』の書き出しは、山村英夫が雑沓のなかを歩いているところから始まっているが、「うしろに連っている群衆が、彼の軀をゆっくりした一定の速度で押しつけてゆく」と書かれている。この山村英夫はひたすら人から押されていて、人を押すことはいないし、できない。ただただ「押されている」のである。しかも「背後から押し寄せてくる人の波は、彼に立止ることを許さない」のである。押されるままに「押されている」ほかはなく、人を押す心を失わせられている。こういう現代青年にとっては、娼婦との交渉がもっとも「精神の衛生に適っている」のだが、『驟雨』の山村英夫は娼婦道子を「愛する」ことによって「自分の分身を持つ」ことになった。ここで物語をさかのぼって、この「押されている」だけの山村英夫が、どうして「愛する」という、人を押す積極性を持ちえたか、それをもう一度考える必要がある。相手の娼婦から愛されたからか。「受身の位置というものに、異常なほどの不潔感を覚える性癖の彼」という言葉が『黒い手袋』（三十年）という作品のなかにあるが、山村英夫もまたそうした性癖の持ち主

と思われる。愛されることによって「愛する」という積極性を彼が持ちえたとは思えない。では、どういふのか。この娼婦道子はそもそもはじめからこの山村英夫の「分身」だったのである。この「分身」という用語は、前掲の作者の文章からの借用で、「分身」では不正確なら、山村英夫と同じような、「押されている」人間が女であった場合は、この道子なのであるという意味である。「愛する」という現象が、積極性ということと無関係に生じた理由はここにある。

山村英夫の「分身」としての道子は、その「分身」の故に、娼婦らしからぬ娼婦である。そうした娼婦を『驟雨』では山村英夫の眼から描いていて、道子の内面には入っていない。内面に入って描こうとしたのが『原色の街』（三十一年）である。ここには娼婦らしい娼婦も脇役として登場して来るが、そういう娼婦らしい娼婦を描こうとしたのが、『娼婦の部屋』（三十三年）である。この作品の娼婦秋子は、作者が女を描くことがいかにうまくを示している。しかしこの作品もまた、娼婦そのものを描こうというところに作者の制作意欲があるのではない。この作品の主人公もまた「押されている」人間（「痛めつけられた男」と作者は書いている）で、そうした男と、娼婦らしい娼婦との交渉を作者はここでねらっているのだ。

単行本『娼婦の部屋』には吉行君の傑作のひとつである『鳥獣虫魚』（三十四年）が収められているが、この『鳥獣虫魚』の主人公も「痛めつけられた男」であり「押されている」人間なのである。彼等は一体、何に「痛めつけられ」「押されている」のか。ある出版社にとめてある『鳥獣虫魚』の主人公の「私」は、ある日、「荒縄で縛り上げられ、送り返されてきた」本を、「二十歳をいくつも出していないというのに、下腹に中年男のように脂肪がついた」男が、「また、こんなに戻ってきやがった。このやくざ本め」と足をあげて蹴とばすのを見て、「痛い、痛いじゃないか」と言う。「私」は自分が蹴られたような痛みを覚える。それはその「やくざ本」を作ったのが、「私」だったからか。その本は彼自身に他ならないのだ。その本が売れなかったのは、売れるに値しない「やくざ本」だったからではない。売れる、売れないは、その本の持っている価値とは別問題なのだ。人間がその人間の持っている本来の価値によって生きることが許されないこの現代社会に、「痛めつけられる本と同じなのである」人間は、売れないことで足蹴にされる本と同じなのである。

現代社会の人間疎外ソウガイによって「痛めつけられ」「押されてる」人間——これこそが吉行君の描いている現代青年の典型像なのである。人間疎外ソウガイによって非人間化を



強いられている現代青年にとっては、「街の風物は……すべて石膏色」（『鳥獣虫魚』）であり、「結局生きてゆく余地が無くなってしまい、生きてること自体が、間違いだということになってしまふ」（『原色の街』）のであり、そうなると思婦の部屋だけが「安息の場所」で、そこで、「自分が生きていることを確かめよう」（『娼婦の部屋』）とするのである。そうした男の「分身」としての娼婦もまた、人間疎外からの脱出と解放を、みずから娼婦になることにもとめ「この街からしか解放感を見出すことができぬような立場に置かれた」と思いこむことで「結局は彼女を一層不幸にしてゆくということには……まだ気付いていない」（『原色の街』）、そういう女性である。こうした人間典型の造型に吉行君の文学的特質がある。

『驟雨』のなかに「彼は瞬時のうちに自分が童児と化して、若い美しい保姆の前に立たされて錯覚に、ふと陥った」という言葉がある。錯覚させた相手は娼婦である。娼婦は旅に出る彼に、手紙をくれるようにと娼家の住所と自分の姓名を一語一語念入りに「幼稚園の先生の類を連想」させる「教え訓すような口調」で言ったのだが、それにしても娼婦を前にして、彼はみずからを「童児」のごとくに錯覚する。これと似たような例をもうひ

とつ挙げれば、「散文における処女作」（単行本『驟雨』のあとがき）と吉行君がみずから言っている『薔薇販売人』（二十四年）のなかには次のような言葉がある。「そういう彼女の言葉の調子は、丁度——可哀そうな坊やといっているような響きが含まれていた。」この彼女とは小説の主人公（商事会社の若い社員）がニセのバラ販売人になって、バラを売りに行った相手のミワコという女である（『処女作』のこの主人公がすでに人間疎外に「痛めつけられた」男であることは注目されねばならない）。この小説には更に、こういう叙述がある。「……ミワコは、初心な少年のまえに、ぬめらかな裸身を露わにしている想像に刺戟されて……」云々。みずからを「坊や」と感じる主人公は、相手の女にも「少年」を感じさせている。

このように小説の主人公たちにみずからを「少年」「童児」と感じさせる作者の吉行君は、彼自身が、「初心な少年」の心を持った人とも言える。少年そのものを描いた作品にすぐれたものが多いのも、ゆえなしとしない。少年を描いた作品群のなかでは、わけでも『悪い夏』（三十一年）は傑作のひとつである。同じ年の作品である『水族館にて』は、大学生と若い人妻の物語だが、この大学生にも「初心な少年」の眼がある。結婚した相手の男が、その若い人妻にとっては彼女の「人生へ